

一情景

著者	鵜殿，新一
雑誌名	龍南
巻	2 1 0
ページ	4 7 - 4 7
発行年	1929-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/6882

一 情 景

「君チエホフて知てるだらう？」

「チエホフて！どちらでも！オルガンて埃っぽいものね、

何だか氣落してしまうわ」

「思ひ出はないのかいオルガンに就て」

「それあ、鳴らしたかつたわ、小學時代にね、よくTて

オールドミスの先生が鳴らしたけ、西日にがらんとし

た教室で……」

「不平をだらふ、結婚に遅過る事はないて工合に」

「あれ昔流行つたでせふ。流れ流れて落ちゆく先は：

て言ふ唱をよ」

「一体君は流れ流れて何處まで落ちゆくつもりだい」

「今は御覽の通りよ」

「でも御満足だらふ、オルガンが鳴らせるから」

「だから思ひ出すのよ、あの女先生をね」……

青年は妙に腹立しさを感じた、オルガン、女給―チエ

ホフ：

身体溢杯にチエホフの埃をあびてる氣がして來た、歸

途いくらはたいも胸の何處かに消殘てるオルガンの音

と温い埃の香を感じながら。

(鵜 殿 新 二)